

尾鷲ぶらりぶらりと考えた①

中村山公園にて



名古屋から JR 関西・紀勢線の特急に乗る。木曾川・揖斐川を超えて三重県に入ると、伊勢平野の街並みや田畑が続き、山が遠くに見えるが、松阪を超えると茶畑の向こうから山が近づいてくるようだ。紀伊長島（紀北町）を超えると間近に迫った山と熊野灘の海岸の間を列車が走る。やがて、私たちが活動している「尾鷲」に到着する。東京から、4 時間 20 分程、交通網の発達した現在でも、結構に時間がかかっている。

尾鷲駅で降りると、目の前に小高い場所が見える。標高 50m の中村山公園である。山頂に着くと大空を仰ぎ尾鷲の海や街並みが一望できる。「天文科学館」もどっしりと構えている。日本でも有数の雨量が多い尾鷲に「天文科学館」と思われるかもしれないが、晴天の日が意外と多い。空気が澄んでいて星がきれいに見えるという。

太陽や月、星は人間にとって、「見上げる」ことしかできない。山も見上げることが多いが、頂上に登って、大空を仰ぎ、海や街並みを眺めることもできる。強靱な体力と知識と経験の積み重ねがあればどんな高い山にも登ることができることだろう。また、ケーブルカーやロープウェイによって観光化された山もあるし、初心者向けのガイド本も多く出ている。

しばしの時間、大空や海、街並みに癒やされていると、野外での活動ができない人たちのことを考えてしまう。車椅子などを利用していて歩行ができない人たちには、「山に登る」という体験は難しい。自室や病院や施設のベッドで寝たきりの生活をしている人たちもいることだろう。1970 年代に障がい者運動を牽引した横田弘の詩を思い出す。

僕は空の広さを知らない
そらはしょつ中黒い木のわくにおさまった
四角いもの
その四角い空を
あるときは雲がゆっくりと右から左へ動き
あるときは鳥が対角に飛び去る

又時には

まだシャボンのにおいのしそうな

色とりどりの洗濯物が (原文 色とりぐ)

四角い空の大部分を占める

竿の四角い空が

薄くかすめば春が来たと喜び

深く清めば秋が来たと悲しむ

そんな僕を人々は片輪者と呼ぶのだ

「四角い空」横田、一九五五

(「障害と文学」P171 荒井裕樹 著 現代書館)



重度障がい者として生まれ、学校にもいけず、在宅のまま過ごした作者にとっては、窓から見る景色だけが外との接点だったのだろう。

さらに、びわこ学園の医師、高谷清は「重い障害を生きるということ」のなかで、

「つまり移動ができるかどうかと言うことは、ただ、不自由かどうかだけではない問題があるだろうと言うことで

ある。

地球上の空間は、三次元の世界であり、すべては三次元空間に存在しているし、もちろん人間はその空間における立体的存在であり、その三次元空間を移動する。そしてそこには時間が存在する。だが重症心身障害と言われる人たちは、一歳を過ぎても立位はもちろん座位もとれず、移動もできない。何らかの介助がなければずっと平面上に動かずに存在している。つまり平面の二次元世界で存在し、時間も感知しにくい状態にあると言える。

「ねたきりで、移動ができないとすると、その存在は、空間の長さや幅、さらに高さの感覚、つまり空間の立体感も実感しえないのではないだろうか。三次元の立体空間は目に映っても、異質の世界、別世界ではないだろうか」 (「重い障害を生きるということ」P62 高谷清 著 岩波新書)



私たちは、「太陽や月、星の位置から地球を見ることができない」ように人間にとって手の届かないことは確かにある。しかし、多くの人たちにとって手の届くことができることが、できないとなった時、生きていくことが難しい。世の中は、「できること」を前提に動いているから・・・。

支援がなければできない人たちはどのように生きていくのだろうか？支援を必要とする人たちとどのように関わっていけばいいのだろうか？そんなことを考えさせられた中村山公園での時間だった。

(2023年10月 編集担当)